

株式会社さくら都市総合研究所

主 席 員 清水 秀幸
研究員19 縮小する社会と地方
都市の将来像

しかしながら、冷静に史実をたぐり寄せると、専ら困惑の要因の全てをイトーヨーカ堂のせいにする訳にはい

かない。むしろ、その主たる要因はアーケードを軸線に両脇に商店を構える商業主もしくはその集合体たる組合にもある。

本来、この大型スーパーと周辺商店街との構図は、長野市の計画した連続立体交差化事業に端を発し、それによって地下鉄化された1981年3月に遡る。それまで地上駅であった「権堂駅」は地下化され、不要となった同駅周辺をその地主たる長野電鉄が中心となつて再活性化することを目的に、その中核となるランドマークをイトーヨーカ堂に求めたのが進出の発端であ

る。当時の長野市内の流通勢力図を見ると、圧倒的集客力を誇っていた問御所町（新田町交差点）の丸光百貨店（後の長野そごう）は斜陽を迎え、丸善百貨店（後のながの東急百貨店）は既に長野駅前に移転したことで、軽うじてダイエーはオーブンしたもの、困惑を隠せない権堂アーケード街の人の流れが長野駅に傾斜を始めた頃である。長野電鉄にとつては、一旦流れた流通勢力をイトーヨーカ堂を迎えることで呼び戻そうという思惑も見え隠れする。その結果、進出反対運動に氣勢をあげる隣接の権堂商店街を尻目に、同社がヨーカ堂の求める店舗を造り、ヨーカ堂から建設資金の借り入れをおこしてまで造ったのが今のビルなのである。

清水 秀幸氏（しみずひでゆき）1952

年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在、同研究所社長。

困惑を隠せない権堂アーケード街

